Japan-Netherlands Contemporary Art Exchange Exhibition

アネッケ・A・デ・ブーア | Anneke A.de Boer

アネット・ファン・デ・エルゼン | Anet van de Elzen

クリスティアーン・ズワニッケン | Christiaan Zwanikken

ヘルマン・デ・フリース | herman de vries

パウル・パンハウゼン | Paul Panhuysen

ロブ・モーネン | Rob Moonen

有地左右一 + 笹岡敬 | Soichi Arichi + Takashi Sasaoka

佐藤時啓 | Tokihiro Sato

小杉美穂子 + 安藤泰彦 | Mihoko Kosugi + Yasuhiko Ando

浜田剛爾 | Goji Hamada

水留周二 | Shuji Mizutome

ICAEE / ヘット・アポロハウス共同企画 日本・オランダ現代美術交流展

人・自然・テクノロジーの新たな対話

3分間の沈黙のために

会場・十思スクエア3階

東京都中央区日本橋小伝馬町5-1

期間・2001年4月15日(日)〜5月6日(日)

Three-Minutes Silence...

A New Dialogue between Human Being, Nature and Technology

Introduction

開催にあたって

ICAEE／国際現代美術交流展実行委員会はここに、オランダのヘット・アポロハウスと共同で、日本・オランダ現代美術交流展「3分間の沈黙のために……人－自然－テクノロジーの新たな対話」を開催いたします。

両組織は、95年-96年にかけて「NowHere」(オランダ展)、「根の回復として用意された12の環境」（日本展）を共同開催しました。現代社会における「芸術の自明性の不在と新たな役割」をテーマにしたオランダ展、「テクノロジーと身体の共生による根の回復」を目指した日本展は、ともに〈芸術の現在〉を鋭く問うものとして好評を博しました。

その成果を基に企画された本展は、現代社会に生きる人間の知覚と身体性の回復というテーマをさらに掘り下げながら、人－自然－テクノロジーの調和とは何かを見つめなおそうというものです。

会場には、日本・オランダの先鋭的な11組のアーティストによる、インスタレーション、動くオブジェ、映像・写真表現など多彩な作品が展示されます。いずれも、テクノロジーを介しながら、映像、オブジェ、光、サウンドなど複数のメディアを用いて構成されたものです。加えて、パフォーマンス公演のほか、シンポジウム、ワークショップなども行われ、作品と観客のコミュニケーションを活性化させる様々な試みが展開されます。私たちはこうした場の実現を通じ、皆様に、五感を相互に働かせた鑑賞体験をもっていただけることを願っています。それぞれの作品を、《見ること》や《聞くこと》を、立ち止まって感じていただければと思います。

折しも昨年度は、日本とオランダ両国で交流400周年を祝う行事が繰り広げられました。私たちは、そうした成果をこの交流によって、さらに新たな世紀へつなげたいと考えています。また、本展が営利を目的としたものではなく、芸術と社会の発展を願うアーティストの不断の活動と協力によって立ち上がったものであることを付け加えたいと思います。

最後に、この展覧会の実現にあたり、ご支援・ご協力いただいた中央区、および日本・オランダ両国の関係各機関と皆様方に、心より御礼申し上げます。

ICAEE 国際現代美術交流展実行委員会
代表　酒井　信一

本展によせて

人間にはさまざまな知覚があり、日々の生活のなかで私たちは、身のまわりで何が起きているのか正確にとらえようと、それらの知覚を同時に働かせています。芸術はイメージ、言葉、音や音楽、嗅覚や味覚、身振り、運動、あるいは触覚などを通じて表現することができます。思考・感情・感覚を伝え、表現するにはすべての知覚が有用です。旧来的な芸術分野の境界が打ち破られたのは、なるべくしてなった当然のなりゆきでした。人間の一つか二つの感覚だけに限定されるようなアートの分類方法は、もはやまったく意味をなさないのです。

そのことへの気づきはまた、数多くの新たなアートの領域を切り拓きもしました。それは、芸術が永遠なるべく制作されるという観念をくつがえすものでした。一時的・仮設的なアートの提示が、「永続的なる芸術作品」という固定的な見方を払拭したのです。

テクノロジーの発展は、アーティストたちに新たな表現媒体を提供します。写真、映画、ビデオ、テレビ、音声録音、キネティック・テクノロジー、コンピュータやインターネットなど、こうしたものがアーティストの創作意欲を刺激しています。時々刻々と変化するアート、複数の感覚に訴えるアートは、従来展示されてきた視覚芸術の標準的プログラムの枠組みには収まりません。

現在、数多くのアーティストが新たな芸術形式を展開させ、新しいテクノロジーによるメディアを個々に、あるいはいくつか組みあわせて用いています。ビデオ・アート、映像、写真などは芸術の表現形式としてすでに受け入れられ、インスタレーションやパフォーマンスは美術館においても一般的なものとなりました。

しかし、その進展は未だ完結してはいないのです。新たな表現形式が日々創案され、その展開が成果をもたらすためには、アート界へと針路をさだめつつパブリックに向きあう道を見出さなくてはなりません。

「3分間の沈黙のために…人－自然－テクノロジーの新たな対話 」のような展覧会の重要性は、このような文脈で見ていただかなくてはならないものです。

芸術の活力は、アーティストが持続的に自らの仕事を改良していくことができる、その過程にかかっています。作品に真剣な眼差しを送ってくれる他のアーティストや観客と、頻繁に意見を交わすことによってのみ、こうした過程が生まれてきます。「芸術を理解する」とは、見ること・聞くことによる学びなのです。それは教育的プロセスであり、いわば独習ともいえるものです。かつての小学校においてそのような状況が生みだされたことは、重要な意味をもっています。

1995年のオランダ、アイントホーヘンでの「NowHere」展に始まり、続いて1996年に東京で開催された「根の回復として用意された12の環境」展で、日本とオランダの参加アーティストたちが交わした対話 ── その対話をつなぐ新たな機会が得られ、私はたいへんうれしく、また感謝しています。この新しい共同プロジェクトを実現に導いたICAEE／ギャラリー・サージの渡辺千恵子、酒井信一の両氏へここに心からお礼申し上げます。

ヘット・アポロハウス
ディレクター　パウル・パンハウゼン

Foreword

日本・オランダ現代美術交流展によせて

日本とオランダの交流400年を記念して、昨年から両国においてさまざまな事業が実施されております。オランダとゆかりの深い本区でも、日蘭学会の開所式にウイレム・アレキサンダー皇太子をお迎えし、オランダ王立海軍軍楽隊と警視庁音楽隊による合同パレードを中央大通り・銀座通りで実施するなどさらに交流を深めることができました。

本区の「八重洲」の地名は、1600年にオランダ船で日本に漂着したヤン・ヨーステンの名前に由来しています。将軍に拝謁するカピタンが定宿とした「長崎屋」は日本橋地域にありました。
今回、本区が後援いたします「日本・オランダ現代美術交流展」は、まさに400年前、オランダとの交流が始まったこの日本橋地域で開催されることになりました。

大勢の皆様にご来場いただき、日本とオランダ両国13人の作家による作品鑑賞・パフォーマンス公演・シンポジウムを心ゆくまでお楽しみいただきたいと存じます。また、新たな文化の創造や人びとの豊かなふれあいが育まれ、両国の交流が一層深まることを期待いたしております。

2001年4月

中央区長
矢田美英

ごあいさつ

「3分間の沈黙」展に対して私のメッセージをお届けできることを嬉しく思います。この展覧会は、今年日本で行われます日蘭の現代美術の展覧会のなかで、もっとも意義のある展覧会であります。この両国の作家の交流を図られました酒井氏を始めとする関係の方々にお礼を申し上げます。

このイベントはしばしば人々を分け隔てるはざ間となる言葉や、文化、地理を芸術は埋めることができるということを示しております。このアイントホーヘンのアポロハウスの関係六名の作家の作品と日本の作品を結びつけるという素晴らしい企画をされている主催者の方々は、今回ですでに三回も同様の芸術の世界の共生という企画を成功されております。主催者の方々がこれからもずっとこの企画を続けていかれることを信じております。

現代美術をプロモートすることはたやすいことではありませんし、時として、それを企画するものをひるませるものです。しかし、レンブラントやフェルメール、そしてファン・ゴッホなどといった過去の偉大な作家だけが紹介されるのではなく、このような現代の作家たちの作品もまた紹介されていかなければならないと考えております。つまるところ、現代の作家の作品は現代の社会の反映であります。我々を取り巻く社会のペースはとても速くなっております。芸術はそれらの押し寄せてくる雑音や、毎日のストレス、そして精神の浪費などからの最後の救済になっています。「3分間の沈黙」はそのような最後の砦を我々に提供するものであります。それは逃避の場所ではなく、ちょうど禅がそうであったような静寂な沈思黙考を提供する場所になると思います。

私はこの芸術に満たされた場所を訪れる方々が、その道沿いに実り多い思考の豊かな実を見つけられることを希望いたします。

オランダ大使
E.F. ヤコブス

十思スクエア

企画趣旨

今日、芸術はあらゆるものを表現の対象としながら発展しています。アーティストが取り上げるテーマも、社会、宗教、政治、テクノロジーといったように、現代社会の様々な領域に及んでいます。感じ、捉えたものを表現するアーティストの創造力は、事物の理解や解釈に新たな意味を生み出してゆくことで、作品と観客の対話を活性化します。

本展は、そうした芸術の可能性を、現代社会に生きる人間の知覚と身体性の回復というテーマに沿って求めながら、人－自然－テクノロジーの調和とは何かを見つめなおそうというものです。

電子メディアやテクノロジーの急速な進化は、コミュニケーションの新たな可能性を提供しています。しかし、そのなかで私たちは、消費的な言葉の喧騒や、過剰なイメージの氾濫といった、身体性無きコミュニケーションに疲弊しはじめていることも事実です。情報システムの加速化によって、私たちのコミュニケーションはいまや、知覚・感覚を介しての「交感」から情報の「交換」へと、その質とスタイルを急速に転換しつつあるようです。

こうしたアイロニカルな状況に対して私たちは、「根の回復」から〈沈黙〉に遡る精神の深化の過程を通じ、身体の内なる広がりを獲得することの必要性を感じています。

作品の背後に、芸術作品が創り出す〈沈黙〉を感じとる体験は、ひとつの「交感」を呼び覚ます。

そのような場、創造的思考が醸成する空間の実現に向けて、テクノロジー・アート、サウンド・インスタレーション、パフォーマンスといった最先端の分野で活躍する日本・オランダの11組のアーティストがここに集いました。

コンピュータ制御による人と機械のインター・フェース空間、センサーによって反応する動くオブジェ、光学を駆使した静謐なイリュージョン作品、インスタレーションと身体が相互干渉を繰り返すパフォーマンスといった従来の美術のジャンルを脱構築する作品群が展示されます。映像、光、身体、サウンドが織りなす作品空間のなかで、視覚と聴覚が融合する時間と空間を体験するとき、見慣れた対象が新たな意味をたずさえて立ち上がるでしょう。

芸術家のまなざしを通して、喧騒に充ちた都市のただなかに知覚と感覚の水源としての〈沈黙〉を喚起させる本企画は、私たちの「現在」をはっきりと浮かび上がらせるでしょう。人－自然－テクノロジーの新たな関係性は、五感・感情・身体性を通じてあらゆるものに働きかけていく私たち一人ひとりの精神活動、その内なる時間の獲得から生みだされるのです。

イベント・プログラム

■展覧会会期　2001年4月15日（日）～5月6日（日）開催期間中無休
■開場時間　11:00 am～7:00 pm　(入場は6:30pmまで)
■会場　十思スクエア　東京都中央区日本橋小伝馬町5-1　問い合わせ先　Tel.070-5875-7855

■関連イベント

■4月11日（水）　4:00 pm～6:00pm
●制作公開

■4月15日（日）～5月6日（日）の各土日、4:00 pm～5:00pm
●ワークショップ
佐藤時啓「リキシャ・カメラ」

■4月15日（日）　6:00 pm～8:30 pm 体育館
●オープニングパーティー

■4月21日（土）　3:00 pm～　体育館
●アーティスト・シンポジウム「芸術とコミュニケーション」
パネラー　パウル・パンハウゼン、浜田剛爾、水留周二ほか　司会　酒井信一

■4月22日（日）
●パフォーマンス公演 3:00 pm～パウル・パンハウゼン
4:00 pm～アネット・ファン・デ・エルゼン

■4月28日（土）　3:00 pm～
●パフォーマンス公演
武井よしみち+Blue Ball Company
「I wish you were here」

■5月 5日（土）　3:00 pm～
●パフォーマンス公演
武井よしみち+Blue Ball Company
「I wish you were here」

■5月 6日（日）　3:00 pm～5:00 pm
●パフォーマンス公演
浜田剛爾
「見ることの自由-Looking freedam」

■ICAEE/国際現代美術交流展実行委員会
事務局 ギャラリー・サージ
〒101-0032　千代田区岩本町2-7-13渡辺ビル1F
TEL03-3861-2581 FAX03-3861-2582
URL=http://www.catnet.ne.jp/surge/
Email: surge@catnet.ne.jp

Artists Profiles

アネッケ・A・デ・ブーア Anneke A.de Boer

1969年デビルト生まれ。95年から作家活動を開始。インスタレーションを制作した後、映像や写真を用いた作品を発表。彼女は、私達が人間として社会にいかに「適合」してゆくかをテーマに、そのための方法や知識を得ようと人々が苦悩すること、その社会的相互作用の複雑さを表現する。96年のEast （東側）のための映像作品『黒いピアノ』には、多重の意味が込められている。馬とタンゴを踊る人間。両者の脚部だけを映し出すこの小編は、自己の視界の外で起きていることを「知りたがる」という私たち人間の欲望をかきたてる。西側／東側、現実と人間の意識の二項対立の裏側にある、不吉で悲劇的ともいえる深層を描きだす。

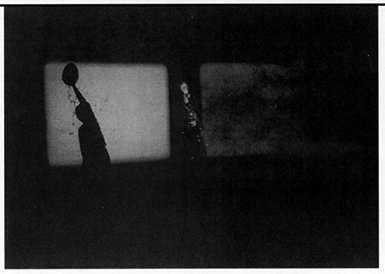
●おもな展覧会……"Werk aan de winkel",ギャラリー7514BK/エンスケーデ95年、"Shaking Patterns",W139/アムステルダム95年、"Home Military",Coolhaven18D/ロッテルダム96年、 "You are fake",VoorheenhetArchief/ハーグ97年 、 "Niggendijker"/グロニンゲン98年、"Satellietprogramm",ギャラリー・マーリッツ v,d,laar/ハーグ98年、"inhaken en gaan",Het Gasthuis, Sanne van Rijnの企画による展覧会/アムステルダム99年、"Organizing of everydays live",芸術組織MeX/ドルトムント99年

"Home-Visitor" 1996

アネット・ファン・デ・エルゼン Anet van de Elzen

1963年ブレダ生まれ。88年、ヤン・ファン・アイク・アカデミー修士課程で学び、90年から作家活動を開始。彫刻・デッサン・写真・映画など様々なジャンルの制作を手掛け、92年からパフォーマンス活動を開始。93年の『Time is Black』では、全身を黒く塗り、アクションと歌によって、夢と無意識から引きだされるイメージを体現した。自らが創出したイメージによって自己を変容させる、そのプロセスを時間・空間に展開する彼女のパフォーマンスは、自らの感覚の源を辿る旅であると同時に、われわれの歴史が葬り去ろうとする身体の記憶、非言語レベルのコミュニケーションの未知なる領域を呼び覚ます。

●おもな展覧会……《パフォーマンス》 "Such Lands", i.s.m.マルコ・アトキンズ/ロンドン92年、"time is black", De Fabriek/アイントホーヘン93年、 "a song",Johan Kuipers展のオープニング/94年 、"A wind rose",デジボーデンベルグ、ドイツでバーバラ・ハンロによって撮影された Hidegardeus von Bingenの最初の画面でのパフォーマンス/95年、"memories",カレル・ドゥイングとグレック・ポウプ（ロンドン）とのパフォーマンス/ロッテルダム96年、"images, dreams, visions"「映像とパフォーマンス45分」デュッセルドルフ美術館/ドイツ96年、"Silence", West India Quai ロンドン 「国際映像シンポジウム」96年、"ontmoeting",Artis/セルトケンボス96年、 "my world is your world"/クリステンサンド98年、"senzae con Flavio", Safe buildings/セルトケンボス99年、 "life is red", Galerie Brekelemans/アイントホーヘン2000 年

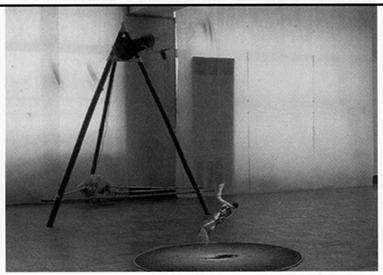


"Silence" 1996-1997

クリスティアーン・ズワニッケン Christiaan Zwanikken

1967年ブッスム生まれ。90年より、電気エネルギーや空気圧の推進力を用いた動くオブジェのインスタレーションを発表。様々な音響を伴って動くそれらのオブジェの動態は、ときには人間の手のようであり、またロボットや動物を思い起こさせるものである。各々のオブジェの動きはコンピュータでプログラミングされているが、凶暴でグロテスクな動きを直線的に示すかと思えば、ユーモラスに回りはじめるといったように、決して無機的な印象は与えない。システム自体の明晰さと、それに反する不確定性との共存を明快に打ちだし、制御による非制御状態を作り出す彼の作品には、「遊び」の精神が宿る。

●おもな展覧会……『騒々しい部屋』ギャラリーArti Et Amicitiae/アムステルダム90年、「アートとテクノロジーの統合」TART科学技術大学/エンスケーデ90年 、『終わりに少しの騒音』「ヨーロッパ国民フェスティバル」/ミュンスター91年、「キネティック彫刻委員会」/ズーテルマール92年、「テレビを消すための装置」RVUテレビ/オランダ92年 、"Uriot Art Prize 1993"、"Exinferno" ,Blairギャラリー/アムステルダム 95年、日本・オランダ現代美術交流展"NowHere"/アイントホーヘン 95年—「根の回復として用意された12の環境」/東京96年、"Our Village",ビーム劇場/アムステルダム96年、"10 years Niggendijker", Kunstcentrum Niggendijker/グロニンゲン97 年、"The Second",Museo Universitario del Chopo/メキシコ98年 、"De Novoem Movimento",聖フランシスコ修道院ギャラリー/ポルトガル99年



"Play-Time" 1996

パウル・パンハウゼン Paul Panhuysen

1934年ボルフハーレン生まれ。59年から作家活動を開始。個展や国際展を経て、作家活動と並行し美術館のキュレーターも務める。80年に「アポロハウス」を設立し、ディレクターとして実験的な芸術活動を牽引する。82年から始まった代表作『ロング・ストリングス』シリーズでは、展示室や建築物に張り巡らせた糸を手や弓で弾き、また自身の声で空間を満たした。空間の建築上の意味をインスタレーションとしての造形性に変え、パフォーマンスによって空間を視覚的・聴覚的イメージの共鳴体へと変貌させる。絵画や彫刻といった伝統的な区分の拒絶、あるいは、美術・建築・音楽を結んでジャンルを横断的に脱構築する彼の作品には、現代芸術が目指す一つの方向性がはっきりと示されている。

●おもな展覧会……第7回 「パリ・ビエンナーレ」/パリ71年、オーガスタン美術館「F.A.U.S.T.フェスティバル」/トゥールーズ88年、"19 Exploratorium Artist in Residence" /サンフランシスコ93年、P.S.1美術館/ニューヨーク 91年、"Exploratorium Artist in Residence "/サンフランシスコ93年、ジーベックホール/神戸94年、"Soundsphere 94"/京都94年、 日本・オランダ現代美術交流展"NowHere"/アイントホーヘン 95年—「根の回復として用意された12の環境」/東京96年、Experimental Intermedia /ニューヨーク98年 "Experimentelle Musik Munchen",Phoebusギャラリー/ロッテルダム99年 、"Academie voor Drama" (workshop)/アイントホーヘン 2000年

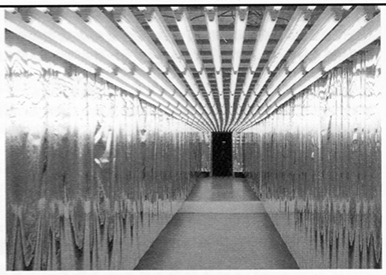
"A Class on Mechanical Acoustics" 1996

Artists Profiles

ロブ・モーネン Rob Moonen

1958年スケイスベルグ生まれ。91年から作家活動を開始。彼の作品には市場の流通からこぼれ落ちた日常の廃棄物が多く使われる。目的性や人工的な包囲から素材を解放し、それらが持つ最小限の存在性を美的構築物として変換する。98年の『Overexposed』では天井に無数の蛍光灯を付設し、壁面を反射用のアルミシートで覆い、あえて露出過度の空間を作りだした。そこには緊張した内的世界と強迫性が潜む。現代社会のなかを反・彫刻のための建物や瓦礫を遊牧民のように探し求める彼は、物質文明の強迫的な過剰さに対して、人間の「発見」と「自由」を、構造物の秩序の組み換えと共に、メタファーの変換と解釈によって告発する。

●おもな展覧会…… "Union", Kunstlerhaus Bethanien/ベルリン91年、"Achse Solitude Stammheim"ism Olaf Arndt Kunsthaus Bethanien /ベルリンほか94年～96年、"Floating Identities" チュッペロ・ワークショップ/ Kaapstad RSA96年、"Permanent Light" Nova Zembla /セルトゲンボス97年 、"Passage"インスタレーション Bahnhof Zoo ism Olfa Arndt & Nils Peters/ベルリン96年、"Overexposed" Faxx podiumvoor hedendaagse kunst /ティルブルグ98年、"Between the lines" De Overslag /アイントホーヘン99年



"Overexposed" 1998

ヘルマン・デ・フリース herman de vries

1931年アルクマール生まれ。50年代、造園土木を学びフランスで農業に関する仕事につく。その後、オランダで植物保護事業に従事。53年から作家活動を開始する。草花・種子・枝など植物を用いた彼の作品は、トウモロコシを植え、卵を買い、野イチゴを集めるといった彼自身の「ライフスペース」から生まれたものである。日々の営みのなかで出会う何気ないものを拾い上げて美を生みだすこと、呼吸し-働き-食べ-飲む、それによってより良く生きること。すなわちそれは、大いなる生命の循環に参加する意志であり、「ライフスペース」と彼自身の統合のドキュメントである。雑誌、アートブックなど出版物も多数。

●おもな展覧会……「自然と芸術」ステドリック美術館/アムステルダム57年、ギャラリー31/ドルドレヒト59年、「ゼロ」 ニュービジョンセンター/ロンドン64年 、「基本的に白」 I.C.A/ロンドン74年、「 流れのドキュメント」 アポロハウス/アイントホーヘン 81年、「芸術家達の業」ポンピドー・センター /パリ85年、 「芸術における自然について」メセパラスト/ウィーン90年 、「地球、命と詩、具体的美術の空間 」ロイヤル植物園ムアン・ソルトゥ/エジンバラ91年、「沈黙について ザヘータ」/ワルシャワ92年、「山の上の彫刻」ワーゲニンゲン農業大学93年

"the poet his poetry" 1972

有地左右一＋笹岡　敬 Soichi Arichi＋Takashi Sasaoka

有地左右一・1957年大阪市生まれ。笹岡敬・1956年富山市生まれ。88年のシリーズ作品『WATER』とその後のシリーズ『LUMINOUS』でARICHI＋SASAOKAは、《水》や《光》といった非形成的な素材をとり上げ、シンプルにコントロールされたシステムにより、それらが織りなす精妙な陰影を再現した。93年からの『REFLEX』では光源の映像をカメラオブスキュラの原理を用いて暗く静謐な空間に浮かびあがらせた。観客は、感覚と記憶が戯れるような彼らの作品を通じて、身体と精神が失いかけている何ものかを取り戻す。こうした制作活動と並行して98年には、自主運営スペース「CAS」を立ちあげ、アーティストと観客の交流の場を運営している。

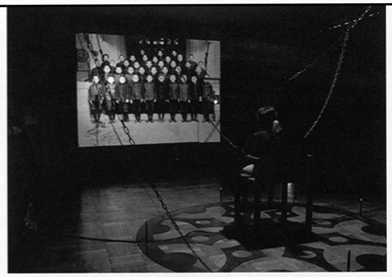
●おもな展覧会……『WATER88・89』オン・ギャラリー/大阪88・89年、『WATER』ギャラリー・サージ/東京91年、『Music』ジーベック・ホール/神戸93年、『REFLEX』イトーキ・クリスタルホール/大阪93年、「光りと影」広島現代美術館/広島94年、『ルミナス1994』ギャラリー・サージ、秋山画廊/東京94年、日本・オランダ現代美術交流展"NowHere"/アイントホーヘン 95年―「根の回復として用意された12の環境」/東京96年、 「光をつかむ－素材としての光の現れ」O美術館/東京97年、『REFLEX1999/1』「パドゥルズ」テント/ロッテルダム99年

"REFLEX" 1999

小杉美穂子＋安藤泰彦 Mihoko Kosugi ＋Yasuhiko Ando

小杉美穂子・1953年境市生まれ。安藤泰彦・1953大津市生まれ。 83年からコラボレーション・ユニット『KOSUGI＋ANDO』として活動を開始。美術館の一室やギャラリー空間全体を使い、言語テクスト、ビデオシステム、コンピュータなどコミュニケーションを支える諸装置を用いたインスタレーションを創り続けている。96年の『ペンデュラム』では観客の動きに応じて、卒業写真が現在から過去へ連続的に投影され、場の歴史を現前させるとともに「現在の不在」を浮かび上がらせた。様々な事物を情報レベルで再構築し、《個と個の連鎖としての世界》をシュミレートする彼らは、コミュニケーションの可能性を提供するのみならず、人と機械の相互作用的な作品を通じて、我々が自己を分析し知覚する場を用意する。

●おもな展覧会……『通路』ギャラリー16/京都84年、『アクタイオーンの夢』「京都アンデパンダン展』/京都86年、『芳一物語と研究』「京都アンデパンダン展』/京都87年、『NINE ROOMS』ＡＢＣギャラリー/大阪89年、『FLASHBACK』三菱地所アルティアム/福岡91年、京都市主催『今日の表現 １』四条ギャラリー/京都91年、『Stolen Bodies1』ギャラリー・サージ/東京91年、『ペンデュラム（振り子）』日本・オランダ現代美術交流展"NowHere"/アイントホーヘン 95年―「根の回復として用意された12の環境」/東京96年、『呼吸法』ギャラリー16/京都98年



"ペンデュラム" 1999

Artists Profiles

佐藤 時啓 Tokihiro Sato

1957年酒田市生まれ。88年から写真作品を発表。シリーズ『Breath-graph （息づく写真）』は、都市や廃墟、寂れた農村といった場所を長時間低露光で撮影したものである。被写体となるフィールドを作者自らが歩き回り、鏡を使って太陽光線をカメラに繰り返し反射させた行為の軌跡が、巨大な風景の画面のなかに、多くの光の点や線となって散在する。それらの作品は、私たち自身が忘れかけている内なる風景の記憶を喚起させる。近年は、人力車を走らせながら風景を写しだす「リキシャ・カメラ」、巨大なカメラを自動車で移動させながら、外部やそれが置かれている状況を記録する「漂流するカメラ」と題したプロジェクトを展開している。

●おもな展覧会……ルナミ画廊/東京91年、 Eスペース/東京91年、ギャラリー・サージ/東京93年、「ノートルダム・デ・ジャコバン」/アジャン93年、「第６回東川賞新人作家賞受賞」東川/北海道93年、「日本のコンテンポラリー」東京都写真美術館93年、「バビヨン・デ・ザール」/パリ93年、「観念の刻印」栃木県立美術館/宇都宮93年、「マニエラの交叉点」町田市立国際版画美術館/東京91年、「第10回平行芸術展」小原流会館/東京91年 、「Make-Believe」ザ・フォトグラファーズギャラリー/ロンドン 91年 、「New Space of Photography」/ヴロツワフ91年、「日本現代写真展 」ウォーカーヒル美術館/ソウル 92年、日本・オランダ現代美術交流展"NowHere"/アイントホーヘン 95年―「根の回復として用意された12の環境」/東京96年、「ハバナ・ビエンナーレ」/キューバ97年、「呼吸する風景」埼玉県立近代美術館/埼玉99年

"Photo-Respiration" #385 kokuritsu-soko3 1999

浜田 剛爾 Goji Hamada

1944年青森市生まれ。71年～81年にかけて多ジャンルのアーティストを組織した「パフォーマンス・シリーズ」をプロデュース。日本で最も早くパフォーマンス活動を開始する。72年、ベルリンの壁でのパフォーマンス『咲きの壁』を出発点とし世界各地で公演。80年代に入り"自分史"を中心にソロ活動を展開する。そのなかの「遺伝子」シリーズは北方のウルタイ族、オーストラリア・アボリジニとの出会いから生まれたものであり、その後の《身体を含んだミクストメディア・アート》という彼独自のパフォーマンス観につながってゆく。インスタレーション（フィルム・ビデオ・電子音などを用いた装置）と身体行為とが相互干渉を繰り返すパフォーマンス空間のなかで、時間・空間の通念は揺さぶられ、私たち人間のプリミティブな感情が呼び起こされる。近年、現代美術の〈停滞〉〈延期〉をテーマに活動の領域を拡大しつつある。研究論文も多数発表。

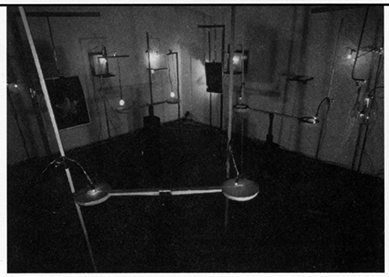
●おもな展覧会……《パフォーマンス》『咲きの壁』ベルリン72年、『Tokyo to Seoul』/東京・ソウル・釜山77～79年、『マテリアル』/東京・京都79・80年、「能と農」/東京・神戸81年、『柔らかい言葉－鮫』/メルボルン81年、「遺伝子」/デュッセルドルフ・東京・メルボルン82～84年、『橋とソリ』/オーストラリア砂漠83年、『100日の朝と夜』/東京・シドニー86年、『チープ・メディア・チプス』/東京、バンクーバー、メルボルン、ベルリン87～93年、『Be Honey Honeycomb』『20周年記念回顧展』/パース92年、『Body and Time』カナダ13都市巡回展/93年、『見ることの自由』/アイントホーヘン、ニース92年、『ブルーランニングマン』/東京・アイントホーヘン96年、『セルフ・ポートレイト』/東京・ハンブルグ96・97年

"ブルーランニングマン" 1996

水留周二 Shuji Mizutome

1950年新潟県生まれ 。80年から個展・グループ展を中心に作家活動を開始。作品と場の有機的な関係性の回復を求め、84年に様々なアーティストたちと「大谷地下美術展」（大谷資料館地下採石場跡）を組織し、実験的な活動を6年にわたり企画・運営した。その後、歴史・科学・生命・社会をテーマに、現代におけるそれらのアイロニックな関係を鋭く抉るインスタレーションを発表している。98年の『ベビーの環境』、翌年の『天秤の悲劇』では、暗い空間に大きな三体の天秤が置かれ、左右の受け皿に当てられた赤や青の光によって、各々の天秤が危うく微かに揺れていた。現実でありえない場面を、先鋭な批評性と多様な隠喩に充ちた手法で実空間に紡ぎだすこれらの作品は、現代を生きる人間のための新たな寓話ともいえる。98年からはアーティスト・グループ「W3プロジェクト」の代表として芸術の自立と活性化に向けた様々な活動を行っている。

●おもな展覧会……『空間の膜』田村画廊/東京80年、「同時代の発話」埼玉県立近代美術館/埼玉84年、『Work-84-8』「大谷地下美術展」大谷資料館地下採掘場跡/栃木84年、「万象の変容」埼玉県立近代美術館/埼玉 86年、『nail』『Spoon has history』「日本・ベルギー現代美術交流展」/東京・ブリュッセル91年、『Star on the egg』「ハーミット・プロジェクト97」/チェコ・プラシ97年、「ベビーの環境」ギャラリー・サージ/東京98年、「天秤の悲劇」ギャラリー・サージ/東京99年、『Star on the chair』「パドゥルズ」テント/ロッテルダム2000年



"ベビーの環境" 1998

武井よしみち Yoshimichi Takei

1953年北海道網走生まれ。84年よりソロ・パフォーマンス活動を開始。84年「Blowing The Wind」で鉄パイプやチューブを吹くことによる呼吸から音への変換を試み、91年「Office Trip」や94年「Dancing Race」では、ひたすら続けられる足踏みによるエネルギーを、装置を通して数値に変換させるなど、常に身体からの視点を基に、〈行為〉と〈物〉が対峙することで現出する身体性をテーマの一つとしている。96年よりブルーボウルカンパニーとの共同作業で電球と光センサーを使用した「大欠伸・Big Yawn」シリーズを展開している。近年は視覚的な身体表現に加えて、作品空間から生まれる〈音〉をテーマに創作活動を続けている。

●おもな展覧会……「 HET VEEM」/アムステルダム88年、 「Performance from Contemporary Japan」/パリ88年、「田島パフォーマンスフェスティバル'90・'91」企画/福島90年・91年、「Amsterdam Summer Festival」/アムステルダム91年、 「Urban Aboriginas ,Tokyo-Osaka ActionArtsヨーロッパツアー」/ 92年、「 Tokyo Dance Scenery」東京FMホール/93年、「ダンシングレース」渋谷BEEM Studio/94年、「 シアターX国際ダンスフェスティバル」/東京96年、「東京ダンスセレクション」東京芸術劇場/97年、「 WESTERN FRONT」/バンクーバー98年、「NIPAF'98・'99」/98年・99年、『 武井よしみちパフォーマンス展』東京ムービングアーススタジオ/2000年

TOYOTA

いっしょにワクワク、いっしょにドキドキ。

もっと、たくさんの感動を応援したい。
これもトヨタの願いです。

トヨタは、全国で19年800回を数えるトヨタコミュニティコンサートなどアマチュア音楽活動をはじめ、美術、演劇など幅広い分野で地域に根ざした文化活動を応援しています。みんなが、もっとワクワク、ドキドキするために、トヨタは、いっしょに歩んでいきます。

トヨタ自動車株式会社

R/Cコントロールシステムの
トップブランド！

営業本部　〒261-8555　千葉市美浜区中瀬1-3 幕張テクノガーデンB棟6F
双葉電子工業（株）無線機器グループラジコン営業　☎043-296-5118
双葉電子工業（株）無線機器ラジコンサービス　〒299-4395　千葉県長生郡長生村薮塚1080　☎0475-32-4395
双葉電子工業（株）関西地区ラジコンサービスセンター　〒533-0013　大阪市東淀川区豊里7-33-10　☎06-6325-8080
中部地区ラジコンサービスセンター　☎052-933-6713　九州地区ラジコンサービスセンター　☎0942-43-4419

MITSUBISHI
三菱電機

デジタル、降臨。

BSデジタルハイビジョン放送の開始
ではじまったデジタル高画質時代。
三菱は、はじめからフルスペックで、
お客様の高度なニーズにお応えします。

BSデジタルチューナー内蔵
BSデジタルハイビジョンテレビ
32D-HX1 本体希望小売価格 400,000円(税別)

D3端子搭載フラットワイドテレビ
32W-HR1/28W-HR1
オープン価格 オープン価格

三菱電機株式会社

32D-HX1

便利に「暮らせる」設備が充実!

ミニキッチン、テレビ、電話、冷蔵庫など完備。セキュリティも万全。

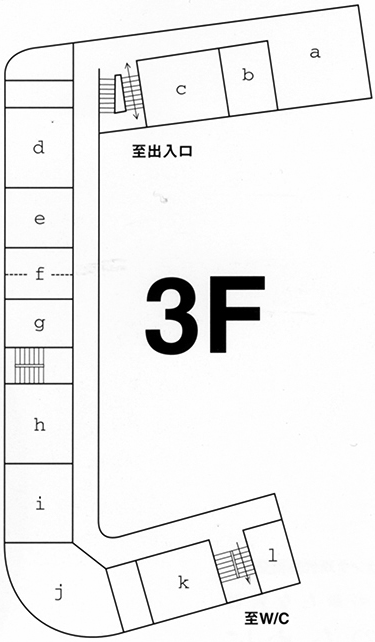
たとえば
おひとり様、
7泊
8日
28,000円から
(税別)
当日予約もOK!

研修・出張・受験に、寮・社宅に。首都圏40カ所、50棟以上<東京・神奈川・大阪・札幌に4,000室以上>から選べるアクセス。

携帯電話のメモリーに登録!
ご予約は サンヨン サンヨン サンキュウ サンキュウ
03-3434-3939

さらに見やすくリニューアル!
ホームページアドレス
http://www.wmt.co.jp

ウィークリーマンション東京



展覧会場案内

a. パウル・パンハウゼン
インスタレーション/サウンド・パフォーマンス

b. ヘルマン・デ・フリース
インスタレーション

c. アネッケ・A・デ・ブーア
映像

d. 有地左右一+笹岡敬
インスタレーション

e. アネット・ファン・デ・エルゼン
パフォーマンス

f. 小杉美穂子+安藤泰彦
インスタレーション

g. 水留周二
インスタレーション

h. 佐藤時啓
インスタレーション

i. ロブ・モーネン
インスタレーション

j. 浜田剛爾
インスタレーション/パフォーマンス

k. クリスティアーン・ズワニッケン
インスタレーション

l. 休憩室

協賛 SUPPORT

TOYOTA
TEPCO
Weekly Mansion TOKYO
YOMOGI

助成 SUBVENTION

財団法人 ポーラ美術振興財団
財団法人 花王芸術・科学財団
財団法人 東京国際交流財団
財団法人 朝日新聞文化財団
Stichting Noordbrabants Fonds voor Beeldende Kunstenaars
Gemeente Tilburg
Gemeente Eindhoven

協力 CORPORATION

Futaba
TOPPAN TOPPAN PRINTING CO.,LTD.
三菱電機株式会社
キリンビール株式会社
株式会社 マスカガミ
東京デザイナー学院
キンコーズジャパン株式会社

Three-Minutes Silence... A New Dialogue
between Human Being, Nature and Technology

人・自然・テクノロジーの新たな対話

3分間の沈黙のために

日本・オランダ現代美術交流展

●会場設営　松野浩、八百板力、森本栄持
●デザイン　坪谷彩子
●写真撮影　村上圭一
●ビデオ撮影　加藤佐和子
●スタッフ　山口隆志、箭内新一、田上真智子、徳田智子、北山理子
●テクニカル・スタッフ　椎 啓
●宣伝・広報　本多路子、渡辺愛、小田井真美
●制作　渡辺千恵子
●印刷　凸版印刷株式会社
●発行
ICAEE/国際現代美術交流展実行委員会
事務局 ギャラリー・サージ
東京都千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル1F
TEL: 03-3861-2581 FAX: 03-3861-2582
URL=http://www.catnet.ne.jp/surge/
Email: surge@catnet.ne.jp

ICAEE/ヘット・アポロハウス共同企画 日本・オランダ現代美術交流展

人・自然・テクノロジーの新たな対話

3分間の沈黙のために